

γ-グロブリン投与量の検討

社会保険広島市民病院 小児科 岡崎 富男

広島総合病院：中島千恵子，河口園江，松本隆彦

広島鉄道病院：毛利久夫，吉光千記

広島赤十字病院：西 美和，梶山 通，藤田篤史

県立広島病院：渡辺泰三郎，捻橋芳久，小倉 敏

安佐市民病院：田辺恭二，佐々木真也，増田 宏

三菱三原病院：波多野修一

双三中央病院：須沢利文，弓場千麻子

あかね会土谷病院：谷本 猛

広島大学医学部附属病院：脇 千明

広島市立舟入病院：藤井 肇，池本裕実子，伊藤明子，久保典夫，進藤久人，

新井 勝，原田佳明

広島市民病院：岡崎富男，西 猛，籠崎祐次，神野和彦，鎌田政博，西村真一郎

（目的）

上記11施設におけるコントロール・スタディーにより，インタクト型γ-グロブリンの投与量を100 mg/kg/日5日間（合計500 mg/kg），200 mg/kg日5日間（合計1000 mg/kg），400 mg/kg/日4日間（合計1600 mg/kg）の3群に分け，その冠動脈障害（CAL）の予防効果を比較し，最小有効量について検討する目的で本研究を行なった。

（対象及び方法）

昭和61年3月1日から7月31日までの5カ月間に上記11施設に入院した4才以下の川崎病患児で，診断基準を満たし，第7病日までに治療を開始出来た患児を対象とした。不全型，再発例，4才以上の者，入院時既に明らかなCALを認めた症例は除外した。インタクト型γ-グロブリンの投与量は表1の如くで，1群：100 mg/kg/日5日間，2群：200 mg/kg/日5日間，3群：400 mg/kg/日4日間とし，アスピリンは全例に30病日までは30-50 mg/kg/日，30病日以後は10 mg/kg/日として併用した。各群の振り分けはコントローラーへの登録順に，無作為に決定した。CALについては各施設において，断層心エコー法により冠動脈内径を測定し，表2に示す基準に基づいて分類した。

(結果)

総症例数は101例で、1群(100 mg/kg) 33例、2群(200 mg/kg) 34例、3群(400 mg/kg) 34例であった。各年齢別の患者数、体重、治療開始病日は表3に示す如くで、各群間での有意

図1 血清 IgG の変化

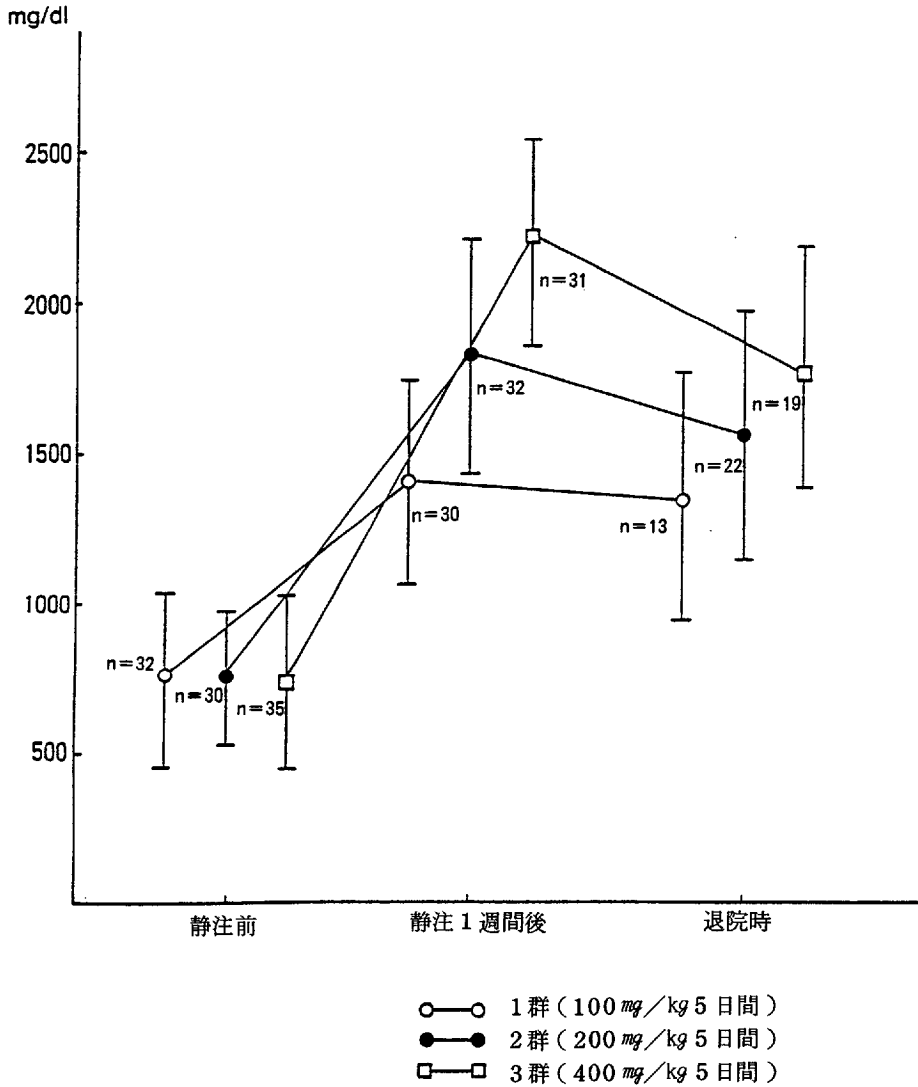
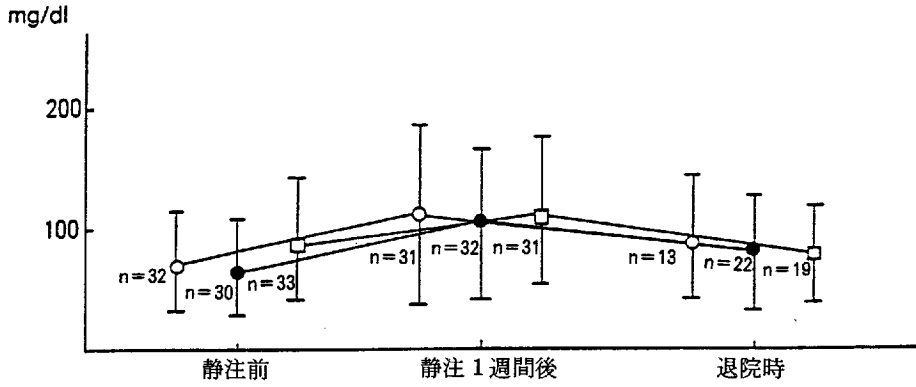


図2 血清 IgA の変化



血清 IgM の変化

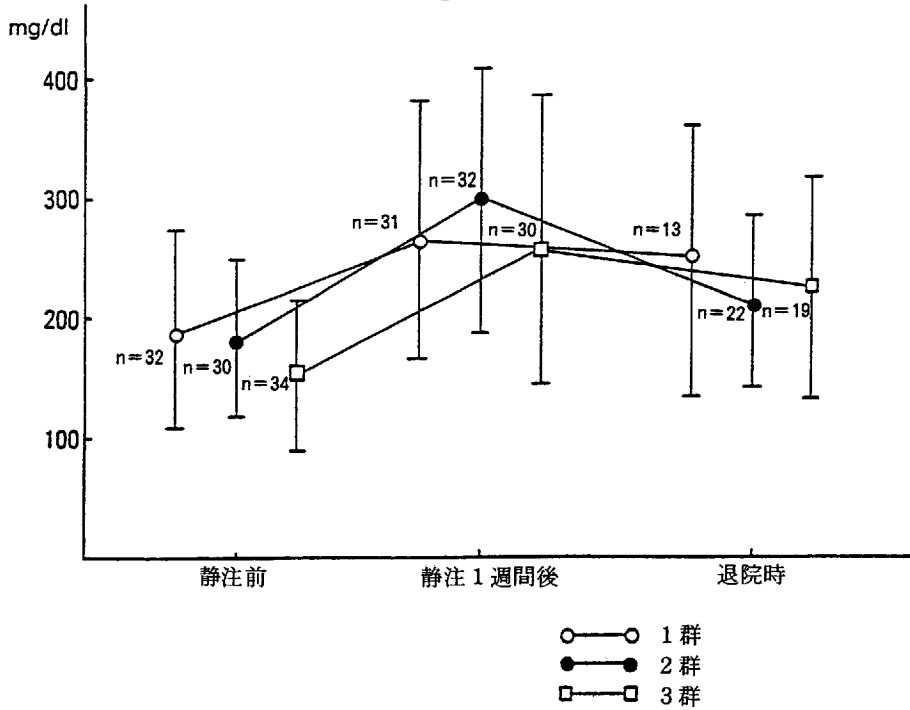
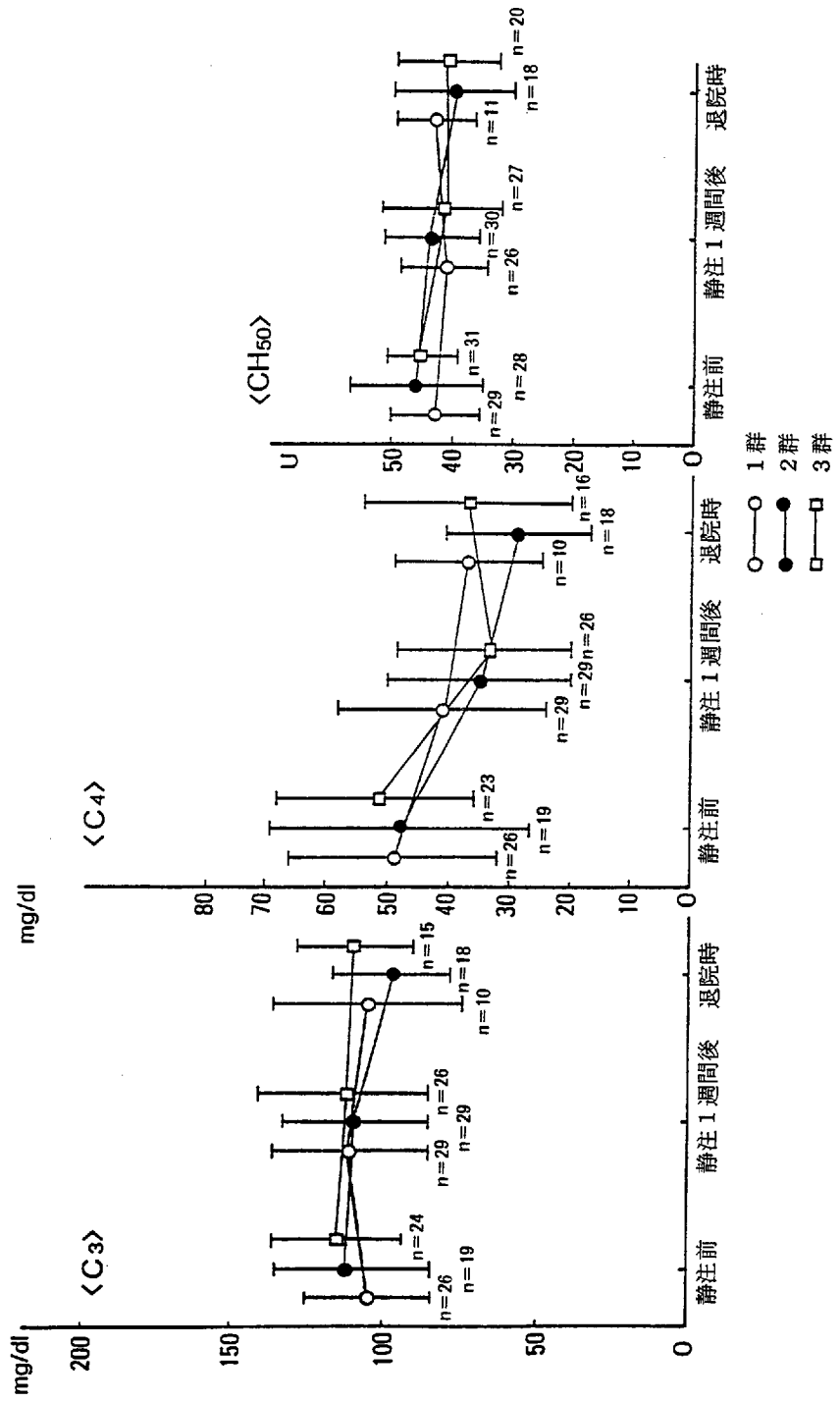


図3 血清補体価の変化



差は認められなかった。臨床症状、検査所見について表4に示した。発熱期間は全発熱期間、 γ -グロブリン投与後の発熱期間ともに各群間に有意差は認められなかった。CRP、血沈の最高値及び正常化病日は各群間に差を認めず、白血球数最高値、血小板数最高値、ヘチグロビン最低値、血清総蛋白最低値についても検討したが有意差は認められなかった。又、入院期間中の血清免疫グロブリン値及び補体価について検討した。血清IgG値は図1に示す如く、 γ -グロブリン投与1週間後にいずれの群においても上昇し、3群は1群と2群に比し、2群は1群に比し有意に高値を示した。血清IgA値とIgM値は図2に示す如く、各群間に大きな差は認められなかった。又、血清補体価について検討したが図3に示す如く、各群間に差は認められなかった。次に、各治療群とCAL発生頻度について検討した。表5に示す如く、発症1カ月後の時点では1群は33例中5例(15.2%)、2群は34例中3例(8.8%)、3群は34例中3例(8.8%)であり、2群、3群は1群に比し頻度は低率であるが、統計学的有意差はみられなかった。発症3カ月後の時点では1群は33例中2例(6.1%)、2群は34例中2例(5.9%)、3群は34例中3例(8.8%)でやはり、有意差は認められなかった。更に発症6カ月後では1群は33例中2例(6.1%)、2群は34例中2例(5.9%)、3群は34例中2例(5.9%)であった。又、8mm以上の巨大な動脈瘤を残したものは1群の2才11カ月男児例のみであった。

(考察)

CALの発生予防に対する免疫グロブリン療法の有効性の検討は古庄らの報告以後、多くの報告がある。今回、インタクト型 γ -グロブリンを100mg/kg/日5日間、200mg/kg/日5日間、400mg/kg/日4日間の3群に分けて投与し、CAL発生頻度と臨床所見について検討したが、3群間に有意の差は認められなかった。しかし、発病1カ月後のCALの発生頻度は各々、15.2%、8.8%、8.8%であり、従来のアスピリン単独療法における発病1カ月後のCAL発生率16.4~31.3%に比し、200mg/kg/日5日間及び400mg/kg/日4日間の群で低率であった。又、8mm以上の巨大な動脈瘤を残したものは100mg/kg/日5日間の群における1例のみで、その他の群ではすべて6mm以下の動脈瘤か拡大のみであった。古庄は合計1000mg/kgの投与量が最小有効量ではないかと報告しているが、これを支持する結果が得られたものとする。又、薬剤のCAL予防効果について評価する際、発病後1~3カ月の時点で判断しないと、その後は自然治癒傾向が著明となる為、真の薬物効果は評価し難くなるものとする。

(文献)

- 1) 藪部友良他：小児内科，17；758-764，1985。
- 2) 古庄巻史他：基礎と臨床，17；659-672，1983。
- 3) 古庄巻史他：Progress in Medicine，5；78-82，1985。
- 4) 大国真彦他：Progress in Medicine，5；64-68，1985。
- 5) 大国真彦他：小児科 27；461-467，1986。
- 6) 岩佐充二他：医学のあゆみ 138；508-510，1986。
- 7) 草川三治：小児内科 17；833-837，1986。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



(目的)

上記 11 施設におけるコントロール・スタディーにより,インタクト型 - グロブリンの投与量を 100 mg/kg/日 5 日間(合計 500 mg/kg), 200 /kg 日 5 日間(合計 1000mg/kg), 400mg/kg/日 4 日間(合計 1600 mg/kg)の 3 群に分け,その冠動脈障害(CAL)の予防効果を比較し,最小有効量について検討する目的で本研究を行なった。